

女形におけるジェンダーの一考察：初代芳沢あやめを例として

台湾大学修士課程 洪慈均

従来、女形に関する研究は主に演劇学の枠内で展開されてきた。女形は性別を越境する伝統芸能として多くの注目を集めてきたが、ジェンダーの視点からの考察はまだ限られている。また、現代社会ではジェンダーの多様性が一層広がりを見せる一方、その議論はしばしば対立や物議を醸し出している。したがって、こうした新しい時代にこそ、女形たちの経験を改めて検討し、そこから参考になる点を見いだす試みに意義があると考えられる。

女形について語る際、彼らの「女性より女性らしい」所作は常に注目の対象となる。その境地に至るための心構えを論じるにあたり、初代芳沢あやめの存在は欠かせない。彼の芸談『あやめ草』には、舞台や日常生活における女形の心得が29カ条にわたって記され、後世の女形俳優に大きな影響を与えた。特に有名なのは、「日常から女性のように暮らさなければ、上手な女形とは言えない」という主張である。あやめ自身もこの言葉を体現し、日常生活においても女性らしい振る舞いを徹底し、リアリティの追求に努めた。

一方、あやめは家庭生活において他の歌舞伎俳優同様、妻子を持ち、息子に名跡を襲名させるなど、典型的な梨園家族であった。また、晩年には立役へ転向する試みも見られ、「女形一筋」という信条からのずれとゆれを垣間見ることができる。

本稿では、あやめの芸談『あやめ草』を参照しながら、初代芳沢あやめの生涯をジェンダーの視点から再検討し、従来の研究にささやかな一考察を加えることを試みる。